春鳥集

蒲原有明

青空文庫

目次Ⅰ

自序 5
日のおちぼ 8
静かにさめしたましひの 10
朝なり 12
遺曲 15
五月靄 24
『今宵のあるじ』 26
わがおもひ 28
銀杏樹 31
みなといり 33

繋縛 35
これに充てむ 36
秋 37
樂しや、さあれ 38
沙門『不淨』 39
君にささぐ 40
末世に 41
人は人とて 42
姫が曲 44
緑のかげ 60

目次Ⅱ

夢の花 61
沈丁花 63
束の間なりき 65
宿命 67
あまりりす 70
夏がは 72
夢のむすめ 74
海のさち 77
琴天會に寄す 78
それゆゑに 79
魂の夜 81
誰かは心伏せざる 83
家根のくさ 85
譯詩三章 87
夏まつり 91
※斧

櫻をばなど寢處にはせぬぞ、
花にねぬ春の鳥の心よ。

花にねぬこれもたぐひか鼠の巢。

ばせを

自序

この集には前集『獨絃哀歌』に續ぎて、三十六年の夏より今年に至るまでの諸作を載せたり。『夏まつり』は最も舊くして、『五月靄』は最近の作なり。『鏽斧』にはこたび引説數行を添へて表面の筋を略敍したり。われはこれを公にしたる當時、世人の看て以て頗る解し難しと爲したるを意外に感じき。引説の如きは蛇足のみ。またこの引説は文字以外の義に及ぼさず、自讃に陷らむとするを憂ふればなり。

＊　＊　＊

詩形の研究は或は世の非議を免かれざらむ。既に自然及人生に對する感觸結想に於て曩日と異るものあらば、そが表現に新なる方式を要するは必然の勢なるべし。夏漸く近づきて春衣を棄てむとするなり。然るに舊慣ははやくわが胸中にありて、この新に就かむとするを厭へり。革新の一面に急激の流れあるは、この染心を絶たむとする努力の遽に外に逸れて出でたるなり。かの音節、格調、措辭、造語の新意に適はむことを求むると共に、邦語の制約を寛うして近代の幽致を寓せ易からしめむとするは、詢に已み難きに出づ。これあるが爲に晦澁の譏を受くるは素よりわが甘んずるところなり。

視聽等の諸官能は常に鮮かならざるべからず、生意を保たざるべからず。然らずば胸臆沈滯して、補綴の外、踏襲の外、あるは激勵呼號の外、遂に文學なからむとす。

「自然」を識るは「我」を識るなり。譬へば「自然」は豹の斑にして、「我」は豹の瞳子の如きか。「自然」は死豹の皮にあらざれば徒らに讌席に敷き難く、「我」はまた冷然たる他が眼にあらざれば決して空漠の見を容れず。「われ」に生き「自然」に輝きて、一箇の靈豹は詩天の苑に入らむとするなり。

視聽等はまた相交錯して、近代人の情念に雜り、ここに銀光の音あり、ここに嚼喨の色あり。心眼といひ心耳といふと雖も、われ等は靈の香味をも嗅味の諸官に感ずることあり。嗅味を

稱して卑官といふは官能の痛切を知らざるものの言ならむか。

時としては諸官能倦じ眠りて、ひとり千歳を廢墟に埋もれし古銅の花瓶の青緑紺碧に匂ふが如きを覺ゆることあり。或は「朱を看て碧と成し」て美を識ることあり。

一花を辨ぜずして詩を作るは謬れり。情熱に執して愛の靜光を愛せざるも亦謬れり。

これをわが文學に見るに、平安朝の女流に清少あり、新たに享けたる感觸を寫すに精しくして幽趣を極む。かの五月の山里をありくに澤水のいと青く見えわたるを敍したる筆のすゑに、『蓬の車におしひしがれたるが輪のまひたちたるに近うかかへたる香もいとをかし。』といへる如きは、清新のにほひ長しへに朽ちざるものなり。元祿期には芭蕉出でて、隻句に玄致を寓せ、凡を鍊りて靈を得たり。わが文學中最も象徵的なるもの。白罌粟は時雨の花にして、鴨の聲ほのかに白く、亡母の白髮を拜しては涙ぞ熱き秋の霜を悲しみ、或は椎の花の心をたづねよといひ、或は花のあたりのあすならふを指す。「古池」に禪意ありといひ、「木槿」に教戒ありと解するは、珠玉を以て魚目と混ずるなり。

このごろ文壇に散文詩の目あり、その作るところのもの、多くは散漫なる美文に過ぎず。ボドレエル、マラルメ等の手に成りたるは果してかくの如きものか。思ふに俳文の上乘なるもののうちには、却てこの散文詩に値するものありて、かの素堂の『簑蟲の説』の類、蓋しこれなるべし。

わが文學は溌溂の氣を失はずして、此等古文古句の殘れるあり。われ等の無爲にして陳腐の

うちに　するをゆるさず。

物徂徠曰く、『萬古神奇悉在陳腐中、天不能舍鶯花而別爲春』と言は奇警なれども、こは自然の富を以て匱しとするに似たり。

また曰く、『其爲人拗、不師古、專而自用、喜快心、惡醞釀、喜放心、惡拘束……天生此一種人物、以轉盛※衰、破醇就漓』と、莊重の辭、晩季の風詢に此の如きもありしならむ。然れども今日の評家、或は識者にして、この言を爲して、新に境地を拓かむとするものに擬するあらば奈何。そはたまたま隆運の萌芽を解せざるに因る。隆運は將に雲蒸飛騰せむとす。われ等は幸にこの日に會ひて、却て舊見を持する舊人の多きをあやしむものなり。

明治三十八年五月

著者識

日のおちぼ

日の落穗（おちぼ）、月のしたたり、
殘りたる、誰か味（たれ）ひ、
こぼれたる、誰かひろひし、
かくて世は過ぎてもゆくか。

あなあはれ、日の階段を、
月の宮——にほひの奥を、
かくて將た蹈めりといふか、
たはやすく誰か答へむ。

過ぎ去りて、われ人知らぬ
束の間や、そのひまびまは、
光をば闇に刻みて
音もなく滅えてはゆけど、
やしなひのこれやその露、
美稲のたねにこそあれ、——
そを棄てて運命の啓示、
星領らす鑰を得むとか。

えしれざる刹那のゆくへ
いづこぞと誰か定めむ、
犠牲の身を淵にしづめて

いかばかりたづねわぶとも、
底ふかく黒暗(くらやみ)とざし、
ひとつ火(び)の影にも遇(あ)はじ。
痛(いた)きかな、これをおもへば
古夢(ふるゆめ)の痍(きず)こそ消えね、
永劫(とこしえ)よ、脊に負ふつばさ、
彩羽(あやは)もてしばしは掩(おほ)へ、
新しきいのちのほとり、
あふれちる雫むすばむ。

靜かにさめしたましひの

靜かにさめしたましひの
一日(ひとひ)は花とにほひ咲く、
ゆふべにねむる花なれば
贈らむすべはなけれども、
わが戀ふる人、君をこそ、

君が眼をこそ慕ひ咲け。

いかにひらきてたましひの
花となりけむ知らねども、
この曉の水を出で、
一日（ひとひ）のすがたゆるされて、
一夜（ひとよ）に消ゆるこの花の
さだめもすでにつたなしや。

高き臺（うてな）のあらばあれ、
光みがける欄干（おばしま）に
垂れてかからむすべもなく、
底ひもわかぬ青淵（あをぶち）の
浪に流るるひもすがら、
君にむかひて咲けるのみ。

靜かにひらく花なれど

花の頸(うなじ)は傾きぬ、
夕ばえ小島巌(いはほ)かげ
彩帆(あやほ)あげゆく鳥船(とりふね)の
すがたはあらで、さびしくも
ゆらぎてたてる花の性(さが)。

いにしへ一代(ひとよ)、后土(おほつち)の
いまだ焔と燃えし時、
火の海原(うなばら)の母の貝、
殻(から)の双葉(もろは)に晶玉(しやうぎよく)を
いつか産(う)みしと人知らぬ
それにも似たるたましひの花。

朝なり

朝なり、やがて濁川(にごりかは)
ぬるくにほひて、夜(よる)の胞(え)を

ながすに似たり。しら壁に――
いちばの河岸の並み藏の――
朝なり、濕める川の靄。

川の面すでに融けて、しろく、
たゆたにゆらぐ壁のかげ、
あかりぬ、暗きみなぞこも。――
大川がよひさす潮の
ちからさかおすにごりみづ。

流るゝよ、ああ、瓜の皮、
核子、塵わら。――さかみづき
いきふきむすか、靄はまた
をりをりふかき香をとざし、
消えては青く朽ちゆけり。

こは泥ばめる橋ばしら

水ぎはほそり、こはふたり、――
花か、草びら、――歌女(うたひめ)の
あせしすがたや、きしきしと
わたれば嘆く橋の板。

いまはのいぶきいとせめて、
饐(す)えてなよめく泥(どろ)がはの
靄はあしたのおくつきに
冷(ひ)えつつゆきぬ。――鴎鳥(かもめどり)
あげしほ趁(お)ひて、はや食(あさ)る。

濁(にご)れど水はくちばみの
あやにうごめき、緑練(みどりね)り、
瑠璃の端(は)ひかり、碧(あを)よどみ、
かくてくれなゐ、――はしためは
たてり、揚場(あげば)に――女(め)の帯や。

青ものぐるま、いくつ、――はた、
かせぎの人ら、――ものごひの
空手（むなで）、――荷足（にたり）のたぶたぶや、
艫（とも）に竿（さを）おし、舵（かぢ）とりて、
舳（へ）に歌を曳（ひ）く船（ふな）をとこ。

朝なり、影は色めきて、
かくて日もさせにごり川、――
朝なり、すでにかがやきぬ、
市ばの河岸（かし）の並（な）みぐらの
白壁（しらかべ）――これやわが胸か。

遺曲

小引――
こは昔春のさかりの
廃（すた）れゆくあはれをこめて、

百合姫の夏のみかどに
傳へたる遺曲のひとつ。

嚴くしや、若草野邊を
稚國としろしめす君、
御冠に黄金を鐫りて、
御座をばみどりに裝ふ。
そを見れば壽も虧けず、
日も朽ちぬ驕樂の宮。
后ひめ、——名は須美禮姫、
花姫の中にもわけて、
うるはしく、すぐれて清き
そのすがた。嗚呼そのかみや、
いかなれば折ふしごとの
移りゆく夢の青淵、
その底にさかりのかげを
あともなく渦まきいるる。

倒れにき、春野(はるの)若ぐに、
大王(おほきみ)の重き冠も
しらみゆく星とあらけぬ、
姫が身もいつ荒土(あらつち)と
いづくにか埋もれはてし。
残りたる瑠璃(るり)の礎(いしずゑ)、
瑯※(らうかん)の柱も、日々に、
砕け墜ち、墜ちて聲なき
荊棘路(おどろみち)、今は夏なる
日のひかりさしそひぬれど、
『あな、暗し、ものう』といひて、
焔なき燭(しよく)を手に執(と)り、
うらぶれて迷ふ大羽子(おほばこ)、
かなたには唇あせて
にほひなき姿はづるや、
衰へてたどる袁杼理(をとり)子、

そのかみはともに樂部(がくぶ)の
よろこびにあくがれし友、――
歌うたひ、琴彈(ひ)き、舞ひて、
大宮の春を頌(たた)へき。

『柳かげくづをれはてて、
おもひでも、今か、荒(すさ)まむ。
ほのかには聞けど、南に
百合姫の朝廷(みかど)はありと、――
ああ、されど、つかれたる身に
行く路のなどしも遠き。
箜篌(くご)とりて、夏のしらべを
古(ふ)りにたる指のちからの
さはやかにいかで、奏(かな)でむ。』――
悲しみに堪(た)へぬものから、
伏しまろび、胸乳(むなち)おさへて、
すすり泣く、あはれ、袁杼理子。

大羽子よ、いかにと見れば
愁ひある眼ざししめり、
『天津日も盲ひたるらし、
往にし世の姿を、花の
欄干を、などやさながら、
まのあたり映し出さぬ。
濃紫ゆかりの譜をば
いとせめて闇路ながらに
歌はまし、いざと思へど、
あやなくに玉の緒みだる。
今にして眞夏の臺
夢にいり、こころに染む』と、
羽翼なき大羽子の身は
たそがるる狹霧路岐を
頸垂れ、まどひかなしみ、
また更に小夜をおどろき、

『暁(あかつき)をいづこの野べに
むかへむ』と大羽子いへば、
袁杼理子は『この世の空(そら)に
東雲(しののめ)をふたたび見じ』と
聲あはせ、手を執(と)りゆきぬ。

たちまちに夜(よ)みちおちいり、
窈冥(かぐろ)門のとざしに遇(あ)へり。
をののけるこころしづめて
聳(そび)えたつ扉(とびら)たさぐり、
『百合姫の音(おと)に聞きつる
夏城(なつしろ)はここか』と問ひて
もろ聲にあやしみあへど、
こだまさへ傳へぬ眞やみ。

寂寞(じやくまく)や、これをたとへば
影青き月のむくろを

かき載せし柩車（ひつぎぐるま）の
水のごとめぐりたゆたひ、
浮ぶとも、沈むともなく
消えてゆくそれにも似たり。

ややあれば黒鐵（くろがね）の戸の
隙（ひま）すきて物こそ見ゆれ、
立ちつくす女人二人（をみなごふたり）
細腕（ほそかひな）あげて、此時
そぞろかに、誘（さそ）はれよれば、
こは昔、宴樂（うたげ）のゆふべ、
霞焚（た）きし瑪瑙の香爐（かうろ）。

ややあれば影はかがやき、
あふぎ見るそのまじろぎの
束のまを、にほひ浮べる
腓（こむら）つき清げの姫や、

華乳(はなち)ぶさ胸にやすらひ、
弱肩(よわがた)の膚眞(はだへ)白く
日の光ここにあつまり、
香(か)をふくむ唇ふるへ、
まなざしはをぐらき森に
豹(へう)の斑(ふ)の射るにも似たる——
神々(かうがう)し、その立姿(たちすがた)。

『百合姫か、夏のみかどの
君か』とぞ二人よりそひ、
姫が踏む土にくちづけ、
つかれたる身をもわすれぬ。

海ちかき山あひの風
吹きおこるおとなひおぼえ、
歌のこゑ、それかと聞ゆ、——
『ますらをよ、とく漕ぎかへれ、

海の外、小島の眞洞、
君をひく白波の手の
なきにしもあらぬこの世や。』
潮うつ櫂のひまびま
益荒夫はこゑうちあげて、
『少女子よ、しのびて待て』と
答ふらむ遠音を聞きて、
大羽子は魂もあくがれ、
袁杼理子は夢かとまどひ、
眼も眩れて僵れ寄る身の
闇の戸にふるる時しも、
嗚呼、ここに幻影たえて、
寂寞の關のとざしは
雷の音にひらきぬ。
『黄泉國、奈落の大城、――
黄泉王いまし等召す』と
門守は責めとどろかし、

かくてこそ二つの影は
とこしへに沈みゆきけれ、
歌もなく、なげきもあらず、
春もなく、夏もなき世に。

五月靄

ひとつびとつに君も見よ
菖蒲（さうぶ）の葉ごと、葉のさきに
露ありて、すがりゆらめきぬ。
（ああ、くるる戸（と）を觸（ふ）るる音（おと）。）

その露のたまひとつびとつ
燦（きら）めきぬ、はたつぶたちて
浮藻（うきも）には添ふ水の泡。
（くるるの音はきしめきぬ。）

水はよどみて、五月靄（さつきもや）
かをれる朝を、魂と身と、――
身やわれ、魂や君か、そも。
（くるるはひびく、なめらかに。）

水を忘れし水草の
花かも君は、――げにしばし
戀をはなれし戀の花。
（見よ、くるる戸（と）のしろがねを。）

われからならぬ手（た）にぎりや、――
豹（へう）の斑（ふ）をこそめでにしか、
誰（た）がかきのせし豹の肩。
（くるるをめぐる火のしらべ。）

あやしの森の濃く青き
常陰（とかげ）か、あらず、五月靄（さつきもや）

褪(あ)せゆく水際(みぎは)を君とわれ。
（聞きね、くるるのくろがねを。）

菖蒲(さうぶ)の葉ごと露ありき、――
わが名をも、いざ、君も問へ、
君が眼(め)、あはれ、君が名よ。
（ああ、くるる戸(ど)の消ゆる音(おと)。）

『今宵のあるじ』

銘器『今宵のあるじ』は友の家に珍藏する古銅の花瓶なり

古代(こだい)なる花がめ、
花のつゆしづきて、

みどりなる古銅(こどう)の
さびや、いとうるはし。

たとふれば寂寞(しじま)の
谿(たに)のおく、垂れてぞ
さきぬべき夕月(ゆふづき)、
その青き一瓣(ひとよ)か。

こだいなる花がめ、
花にこそ四季(しき)あれ、
人にこそさかりの
榮(はえ)、くらきおとろへ。

人の世は、ああ、これ
『宿命(すくめい)』の花がめ、
ここにしてしをるる
にほひ、日にまた夜(よ)に。

よろこびの、愁ひの
雫したたり添ひ、
そのおもに殘せる
痕をだに、見よ、いざ。

いと古き花がめ、
花の魂やどりて
誰を招ぐ『今宵の
あるじ』、——ああ、まらうど。

わがおもひ

わがおもひ——垢膩か、かたゐか、
土の灰、十日ひでりの
ほこり路、いやしき民の
蒸しぐるし衢日中を、

喉渇き、くろぶしやけて
よろめけるさまにも似たり。
たまたまはかたへに避きて、
『信』の井の龍頭より、なほ、
噴く水にうるほひ享けて
跣足、踵、洗ひ浄むれ。――
かかる時、あはれ、ふたたび、
おぼゆるは小さきわが身の
ちからづき、生の火のまた
よみがへり、直路にたちて、
やや支へ、ささふるきほひ。
おぼゆるは、さもあれ、更に
偉なる呵責の力、――
わが脊※つ翅かくやく、
その羽は石絨なして、
その骨に刻む燧石、
しづやかに瞳をかへす

高天の一の日の鳥。
かくてわが命は増しぬ、
地のけがれ、蠍もなにぞ。——
たとふれば、こはこれひくき
燈明の油はつはつ、
ひとしづく焔と照れば
その影を、永劫に、智恵慈悲
無量光護る不思議の
荘厳や。——そのみすくひに
あふぎ見れば、さすがに天は
強し、烈し、あまりに眩ゆし、
眼をとぢて光を吸へば
醉ひごこち、よろしき靈の
みたみらが讃頌のこゑ、
つらなりて起るを聞くよ。
ここにてはなよびの花の
しぼむらむ憂ひなり、はた

つかれなり、うまし盞（さかづき）
もつ手よりすべらむ日なり、
ただ賜（たま）へ、眞夏麻耶姫（まなつまやひめ）、
無憂樹（むいうじゆ）の枝の一葉（ひとは）を、
光明（くわうみやう）の途（みち）にかざして
さらば、今、慣れぬさかひに。

銀杏樹

なべての樹にまさる
銀杏樹（いてふ）よ、くるほしき
北風葉（きたかぜ）をふるへ、
汝（な）が枝（えだ）さすや、唯これ北にのみ。

銀杏樹（いてふ）は北を壓（お）す
南の砦（とりで）。——ああ、
なべての樹（き）のなかに

今の日いやしめる往にし代のさま。

なよびは花むろに、
弱きは盡きて、ここ
小きはひしめける
さやぎを知るや、いさ、汝が天そそり。

銀杏樹よ、（ときめきぬ
わが胸。）あぶら火の
くゆれる、そを嘲み、
ひとりか蝋の香の焔かかぐる。

劫初の浪に、いと
けだかき大洋の
枝より、貝の葉の
砕けしそれか、汝が落葉のゆくへ。

思へばしづかなり
散るとき、立てるとき、
思へば汝が幹は
かの跡世にたちし巨象のねぶり。

汝が身は汝が設けし
おくつき、復た活きて、
汝が日に甦る
眞夏を白鵠の歌かなしまむ。

みなといり

浪喘ぐ灣なかば
萎ゆる帆のふかきはためき、
ものうかるさまや、大船、
ちからなく翅垂れぬる。

常夏の小島を離れて、
いく波折、いく日、わたづみ、——
水手はいま眼をあげぬ、
さがあしきこの港いり。

うるはしき積じろ——眞だま、
奇鳥の羽、あるはまた
香にたかき果實、びやくだん——
いやさらに、かくてものうげ。

天人の食、つらき世に、——
はたくらきこの日よそほひ
かざらむの命のふねや、——
眞帆ぞ、ああ、喘ぎはためく。

底にごる江の波暮れて
澪びきのこゑあをじろし、

黒曜の石をみがける
あだ矢こそ飛ばめ、この時。

もたらしし光けおされ、
わきがたし眞帆と水手とを、
いづこにか泊てつる船ぞ、
まばゆかるま闇のおくが。

繋縛

繋縛人を責むとか、黒鐵をも
黄金と耀やかしなば、その鎖に、
かの天走る宮路の星のごとく、
つながれ行きてぞ妙音世をばふるふ。
身肉愛をさへぎる白埴とか、
ああ、また罪の芽やどす汚穢か、そは、——
清きを、わかき熱きを盛りなす時、

靈の手これ將た讃むる日の高杯。

かかる世、かかる身をこそ、われ等二人、
再び保ちがたしと樂しむなれ。
大華生羽たまたま肩よりぬき、
まことや、君がかへたる口づけには
岩根に凝りて埋みしわれ 玉 髓
光明にいつしか融けて流れ出でぬ。

これに充てむ

素燒の、ああわが命、輕き小甕、
誰が手か轉がしおける、想ひ見れば
古りし代埴安姫が手すさびより、
夏の日、一日、南の山そばにて
製れる埴瓮の遺物——それかあらぬ。
また見る、姫が小指の痕、花うづ、

新たにきのふ享けたる戀のごとく
かがやき面に浮び透きただよふ。
歡樂今なほあらばこれに充てむ、——
八千歳すでに往きしか、星月夜の
宵の間短かき宴すぎ去りしか、
姫神かつては嘗めしかの釀酒、
その香の高きに、あはれ、この命の、
（空なり。）かくて渇きて缺けもやする。

秋

夕暮『秋』はしばしがひま、やさしき
眼をあげ、微笑さへ浮べ、やすらふとき、
鴿あり、めぐし、かたへの水盤より
玉水をりをり羽うつ、いとかすかに。
あな、姫、——階段、石の夢驚き

にほふや――裾ふみたがへ支ふるとて
手を解くひまを、緒琴の面より、見よ、
異形の象こそ照らせ、花のななつ。

おぼゆるこの思ひをば、人には、今、
いかにか説きもつくさむ。雲やうやう
黄金にあかりぬ、花柏こだちのうへ
ただよふ姫が歌ごゑ。風あふぎて
繁葉のしづく墜つれば、青淵なす
大地虹の環染めてゆらぎ出でぬ。

樂しや、さあれ

今日こそいと樂しけれ、君を得ては
わが眼も、げにみなづきの黄なる石と
やけにしものを、うるほひ充ちたらへり、
げによろこびなり、君が胸のにほひ。

夢さへ翅(つばさ)たたみてつつましくも
青浪花(あをなみ)さく岸にたたずむとき、
かがやく希望(のぞみ)の海や、ほたて貝の
帆あげて沖にそひゆく二人(ふたり)ならむ。

樂しや、さあれうれたし、葬(はふり)のをり
火ともす蝋(らふ)の香(か)くゆり、あわただしく
鐃鉢(ねうはち)※さそふ。——今こそ告ぐれ君に、
きのふの『ねたみ』は亡(う)せぬ、遺骸(なきがら)をば
送りし『愛』は涙の友なり、ああ、
黒衣(こくえ)を、見よ、まとひては僧のつとめ。

沙門『不淨』

『おもひ』は經(へ)つや荊棘(いばら)の路(みち)を、今し
乾(かわ)ける土に埋れてめしひぬれど、
ただ聞く、凶(まが)の沼水(ぬまみづ)缺(か)けかたぶき、

をぐらきまむしの谿間たぎちゆきて
ひしめき溢るるさやぎ、――將また聞く、
あだ人きほへる夜の森かげより
篝の火枝啄み滅し去ると
舞ひ來し天の眞鳥の悲しきこゑ。――

かくしも聞くと、わが身にあやし『おもひ』
やどりて眠り、埋れて耳たつれば、
惱みてわれは扉を守る沙門『不淨』、
いつける愛の金堂ここに壞え、
ねたみや、悔や、丹の雨、瑠璃のあらし、
忽ち燃えそふ戀のこれや阿蘭若。

君にささぐ

消えゆく影あり、しばし日の高琴、
まだきに靈をしおくる音をなたてそ、

木のもと微草に、渚なみのはなに、
わが世に、ふたたび、姿さそはまほし。
さはあれ皐月さかりの装ひ棄て
天ゆく影の手弱女、これをかぎり、
まことの戀の宮居の新園守、
君のやひと目、光にしづく眞珠。

豹の斑おせしにも似る追憶もて
『こころ』を、いで、こは香爐、君に捧ぐ、——
そは幾しほの涙に青みゆかむ、
人見て、なほ歡樂の器とせば、
ましろき『命』を据ゑて、君が瞳
照らせしわが身みながら※きてあらむ。

末世に

末世に佛えん離れしかの晶ぎよく、

熱沙の膏に凝れるこの寶石、
こがねの塵になべては舞ひいでつつ、
照りては、また音もなく消ぬるけはひ。
色なる小篋に巣ひ、じやかうの香に
したしみねぶる比翼の燕よ、
南の夢にや倦みし、北のみやこ
あだめく世のくろがみに添ひなむとて。

たをやめ、をみな、ここには榮短かし、
輝く汝が羽かすめ飛び交ふまに
おとろへおとなふ初夜の恨みあらむ。
ああ、媚めく戀の日は夏のうてな
なかばにねびて傾き沈むを見む、——
はかなし、汝が巣も墜ちて人とともに。

人は人とて

わが身をはじめ遠のきて
わが手の外をめぐれども、
星は星なる空の道、
鴿は鴿なる環をあゆむ。

鴿は頸をかたぶけて、
頸をさらにあぐるとき、
誘ひひく手をうち拂ふ
白きつばさの撫づるごと。

かくても媚びて、家鴿の
やうやうなづむそのさまや、
片羽あげても移れかし、
いざ、掌底の宮のうへ。

燃ゆるこころの火のつばさ、
それにはあらね、眞白羽の——

ああ、今、姫よ、――飛びうつる
その眞白羽の君が鴿。

ささげておもふ、水盤（すゐばん）に
これや溢れむ神の水――
鳥は鳥とて羽（は）づくろひ、
人は人とてものおもふ。

姫が曲

この曲は材をギル氏（W. W. Gill）が編せる「南太平洋諸島の神話及歌謡」（Myths and Song from South Pucific.）中、「泉の精」（The Fairy of the Fountain.）と題せる一章に採れり。ラロトンガ（Rarotonga）の傳説なり。泉の名をヴァイティピ（Vaitipi）といふ。滿月の後、この泉より出でて、椰樹芭蕉の葉かげに遊ぶ水精の女あり、酋長アティ（Ati）、一夜人に命じて禽を捕ふるが如くして、この女を拉し來らしむ。女はこれより懷孕せり。嘆きて曰く、「腹部を剖きて子を出し、おのが亡骸をば土に埋めよ」と。既にして子を産みぬ。また曰く、

「人界にて一子を設くる時、水國の母は悉く死なむ」と。アティはこの後、女の手を執りて、共に泉底に下らむとしてえせず。とこしなへに水精の女とわかれぬ。

わがこの曲は南國の王の水精の女と共に泉に下らむとするを、未だその女の子を産まぬ前、臨月の苦悶時におきぬ。

『何處(いづこ)へ汝(いまし)しのびて』と、
南の宮の大足日(おほたるひ)
まよひ、なげきに堪へかねて、
多麻姫(たまひめ)の手を手に執(と)らす。
（嗚呼うたかたや、
惜しむとき、消ゆるとき。）

『何處へいまし出でゆく』と、
大榔樹(おほやし)しげる國の王、
南の國の王なれど
今はまどひの園のくさ。

（嗚呼うたかたや、
　浮ぶとて、痛むとて。）

姫はこのとき黒檀(こくたん)の
きざはしひとつ降(お)りなづみ、
大君あふぎためらへば
日は香木(かうぼく)の戸を刻(きざ)む。
（嗚呼うたかたや、
　ためらへど、とどむれど。）

姫が棄てたる沓(くつ)にこそ
晶玉(しやうぎよく)あそべ黄羽胡蝶(きばこてふ)、
姫が素足(すあし)のすずしさは
瑠璃座(るりざ)に匂ふ白蓮華(びやくれんげ)。
（嗚呼うたかたや、
　匂ふとも、棄つるとも。）

『應答(いらへ)せずや』と、大足日
姫をひかへて問ひよれば、
かがやきいでし生華(いくはな)の
垂れなす姫が柔頸(やさうなじ)。
（嗚呼うたかたや、
問ひよれば、垂れなせば。）

『ことに身ごもる姫が身の
いづこへひとり出でゆく』と、
責むれば暗き眼眸(まなざし)や、
ふかき瞳子(ひとみ)に火ぞ燃ゆる。
（嗚呼うたかたや、
燃ゆるとや、責むるとや。）

『濃(こま)やかなりし一歳(ひとせ)の
ちぎりをいかにおもへりや、
姫よ』と、王のかく言へば、

姫は『今こそ語らめ』と。
（嗚呼うたかたや、
　今はこそ、さらばこそ。）
黄金の鈎に龍王の
懸鈴たかくかかりたる、――
王は鈴索手にとらす、
姫は『今こそ語らめ』と。
（嗚呼うたかたや、
　語らめと、また更に。）

おもひに姫の沈むとき、
鈴は音なき海の色、
燈火あぐる龍宮の
少女を彫りてうかび出づ。
（嗚呼うたかたや、
　浮びいで、沈み去り。）

あるひは鈴の音にたたば
階段のまへ※の華、――
多麻姫、王のすそに伏し、
三度『今こそ語らめ』と。
（嗚呼うたかたや、
咽ぶなり、三たびなり。）

香爐の猊やうながせる、――
姫はうちいづ、『君が手に
わが手をそへて※きもしつ、
白檀の香、沈の香。』
（嗚呼うたかたや、
手に手とか、香と香。）

姫はまたいふ、『大宮の
榮華をば誰かいとはむ』と、――

姫が聲ねは睡蓮の
水にゆらるる夜のこゑ。
（嗚呼うたかたや、
夜の聲、花の聲。）

またいふ、『悔いて、うちわびて、
さびしくひとり歸らむ』と、
その言ふふしをあやしみて、
王は『いづこへ歸るとか。』
（嗚呼うたかたや、
うちわびて、あやしみて。）

『水より湧きし水の泡、
泉の底に生ひたちぬ、
君は南の國の王、
わが身もとより水の精。』
（嗚呼うたかたや、

水の精、水の泡。）

姫はまたいふ、『一歳や、
さきの夜と、このけふの日や、
かの夜に君はわかくして
王座に即きし夜の宴樂。
（嗚呼うたかたや、
さきの夜と、けふの日と。）

王はかこちぬ、『げにさなり、
かの日に榮えし日の王座。』
姫はまたいふ、『膏油燃え、
黄蝋照りし夜の宴樂。』
（嗚呼うたかたや、
夜の宴樂、日の王座。）

さてしも、王が前にして、

『嗚呼愛慾と、驕樂と、
かの夜この身をさそひき』と、
ひざまづきてぞ姫のいふ。
（嗚呼うたかたや、
愛慾と、驕樂と。）

姫はまたいふ、『大宮の
ひかりこめたるかの夜半に
泉をいでし少女われ、
歡喜女天を祈りき』と。
（嗚呼うたかたや、
祈より、泉より。）

見よ、今、姫がひざまづく
衣のあやに影を添へ、
檳榔樹下りぬ、紫金羽の
碧胸毛の垂尾鳥。

（嗚呼うたかたや、
　影の瑞、鳥の文。）

姫はまたいふ、『かの夜すぎ、
七日すぎにしその朝、
御狩にたたす國王の
われを泉に見たまへり。』

（嗚呼うたかたや、
　かの夜すぎ、七日すぎ。）

『そのとき汝白銀の
わが弓とりて隨へり。』

『嗚呼、その日より宮のうち、――
この身もとより水の精。』

（嗚呼うたかたや、
　誘へり、隨へり。）

姫はまたいふ、『夜の空に
かかりて月の滿つるごと、
階段高き一歳や、
みごもりみちぬ胎の月。』
　（嗚呼うたかたや、
　　盈つるにか、虧くるにか。）

遽かに姫はをののきて、
滿ちてもゆくか胎の月、――
泉の底の咒咀のこゑ
日として聽かぬ日ぞなき』と。
　（嗚呼うたかたや、
　　かの咒ひ、この愁ひ。）

『水の國なる法章――
人の世に來て、人の子を
一人産むとき、生兒の

千人は死なむ水底に。』
（嗚呼うたかたや、
千人とや、一人とや。）

姫はささやく、『千人子の
泉のくにの血に叫けば、
夜は夜の輪がね輾りおち、
晝は日の軸折れ朽つ』と。
（嗚呼うたかたや、
たふれ朽ち、輾りおち。）

またいふ、『かくて水底に
かへりて罪を重ねじ』と、
その言の葉のあと趁ひて、
王は『われこそともなはめ。』
（嗚呼うたかたや、
重ねじと、離れじと。）

南の國の大足日
多麻姫の手を手にとらし、
二人(ふたり)しのびて黒檀(こくたん)の
きざはし終(つひ)に降(お)りたたす。
（嗚呼うたかたや、
手をとらし、降(お)りたたし。）

紫斑(むらさきふ)あるにほひ百合、
花は泉の戸のしるし、
二人(ふたり)しのびてたどりつき、
二人うかがふ水の國。
（嗚呼うたかたや、
水の國、戀の園。）

王は湧(わ)きわく水を嘗(な)め、
『いざ、この水をとことはに

かつぎてゆかむ水の底、――
今こそ棄つれ日の王座』
（嗚呼うたかたや、
　束の間を、とことはを。）

弱肩白き戀の魚、
姫は衣をかい遣りぬ、――
衣の文のきらめきは
瑪瑙海ゆく孔雀船。
（嗚呼うたかたや、
　孔雀ぶね、戀の魚。）

たちまち青き水の空
王が身もまた沈みゆく、
王はとぢたる眼をひらき、
ひとたび姫がすがた見つ。
（嗚呼うたかたや、

姫かそも、泡かそも。）

その手を王はとりたれど、
泉ゆらゆら湧き上り、
姫が胸乳もさながらに
くだけちり敷く雲母雲。
（嗚呼うたかたや、
湧きのぼり、砕けちり。）

王はこのとき眼も眩れつ、
まろび去るとぞおぼえたる、
今また深き水を出で
耳には姫の聲を判く。
（嗚呼うたかたや、
姫のこゑ、ふかき水。）

泉のくちにうかびいで、

めざめし王が髪をわけ、
姫はうちいづ、『かなしくも
水には慣(な)れぬ君がさま。』
（嗚呼うたかたや、
　慣れぬさま、王が髪。）

姫はまたいふ、『水(みな)ぞこは
水の少女(をとめ)の星月夜(ほしづきよ)、
日の驕樂(けうらく)は君にあれ、
いざ』と、いひさし微笑(ほほゑ)みぬ。
（嗚呼うたかたや、
　そのゑまひ、このねがひ。）

姫はほほゑみ下(くだ)りゆく、
ひとりうかがふ王が眼(め)に
象牙(ざうげ)かたどる絃月(げんげつ)の、
たとへば、沈む水の空(そら)。

（嗚呼うたかたや、
　惜しむとき、消ゆるとき。）

緑のかげ

女のうたへる

緑のかげとおもひしは
みづからなせる悩みのかげ。
青野（あをの）の旅に憩（いこ）ふとは
つかれのやみに墜（お）つるその日。

泉は鳴りて、しろがねの
盞（さかづき）たとへさそひひくも、
あだなる野ぢのすずしさは

天津みそらも黄泉(よみ)の荊棘(いばら)。

つかれなやみの纏(まつ)はれる
みどりのかげを遠く去りて、

ただ君が手の掌(たなぞこ)の
そのかげに入り、あくがれゆかむ。

夢の花

女のうたへる

緒琴(をごと)とはこれ名のみにて
弾(ひ)くは堺(つちか)ふ小指(をゆび)なり、
つちかひ弾(ひ)けば、あやしくも
琴柱(ことぢ)にかかる夢の花。

弾けども、音なく、調なき、
ああ、それさへもことわりや、
百年の桐琴となり、
琴は今宵の土と朽つ。

百年の土、二十とせの
憂をこめていたはれば、
ここにわが眼のうるほひを
うつしてさくか夢の花。

歡樂——それは曩の日の
みどりの浪と流れ去り、
緒琴に生ひし花草の
こよひ短かき香に堪へず。

夢のみだれか、まぼろしの
まよひか、うつつ、つちかふと

見しはをゆびのすがきか、
ああ百年(ももとせ)か、二十(はた)とせか。

『君がこよひの物のねの
なにゆゑかくはせまりぬ』と、
問ふ人ありて肩おさへ、
問ふ人ありて手をとるも、

『こよひわが弾(ひ)く物のねは
朽ちゆく琴のにほひにて、
あやしき花の面影を
見き』と、さながらいかで答へむ。

沈丁花

艶なる夜(よる)の黒髪は
月にきえぎえうつろひぬ、

香に洩れて沈丁花、
なほ、祕めつつむ花のふえ。

朧のかげはゆらめきぬ、
膚に物の音ぞしづく、――
たとへば浪のうねうねを
春は櫂うつ夢小舟。

照らしぬ、融けぬ、あめつちは
宴まどかにうるほひて、
月にはうかぶ月の暈――
ああ、新妻の新室や。

風は紋羅の浮織に
人と草との舞のあや――
ほのに映れる花姿、
弱肩、それとさだめなく。

燭の火くゆる聖殿に
いつく女天をさながらの
春に、こよひは、をみなごの
よき名をささげまつらむよ。

戀のみぞ知る深き夜の
祈祷は永劫に金泥の
紺紙にきえぬ世のまこと、――
あだしごころのえこそわかたね。

束の間なりき

貴なるかげや、※たき
白衣ほのぼの――
ああ、今なえし眼よぎり
にほふは姫か、びやくえの

花の香(か)いぶき。

白玻(はくはり)※ふかくおほひて、
燭(しよく)はその手に、
盡きざる膏油(あぶら)玉(ぎよくずゐ)髄、
消えせぬ焔紅玉(ほのほこうぎよく)、
あるひはこれか。

夢こそひかり、ひまなく
まぼろしうごく、
こは何(なに)、ここに緑の
星かと孔雀(くじやく)舞ひいで、
わが身をさそふ。

貴(あで)なる姫よ、しばしは
その手の燭を、
しばしは掩へ。——ああ世に

わが身ぞ命(いのち)すべなき
ちりひぢ水(みなわ)※。

ほほゑみ、光、まぼろし、
『時』のたはふれ、
束のまなりき、これさへ、
やがては眞闇(まやみ)おくつき、——
白衣(びやくえ)きえゆく。

宿命

花の門(かど)ならね、胸の戸を
黄なる羽(はね)うち、碧(あを)き露
したたるひまを、眞夜(まよ)、眞晝(まひる)、
夢か、花ぞの、——とく知りぬ
　その園ぬちに石人(せきじん)の
　　すがたを、われは。

あこやの貝の日はしんじゆ、
それかとまがふかがやきの
かぎろひわたり、花草は
浪としぶきぬ、いかなれば
　かくもむなしき、石人の
　　瞳子（ひとみ）、まなざし。

臺座（だいざ）をたたむ石を鐫（ゑ）り、
見れば眞白き石ごとに
姫神、龍（たつ）のみ車を
馳（は）せてこそゆけとことはに、
　嗚呼誰（た）がたくみ、石人の
　　御座（みくら）を、かくは。

今、龍（たつ）の羽（は）はうち撓み、
みくるま前を、今、なびき、

しりへに堕(お)つる姫神や、
右に、ひだりに、眼(め)もまよひ、
　狂(くる)ほし、こころ、石人の
　　かげにこの時。

このときいとど花草は
浪とみだれぬ、眼(ま)のあたり
ほのほのあらしまろがりて
ゆくにか、あはれうらがなし、
　わが魂(たま)なやむ、石人の
　　あやしさかひに。

こころはここにつながれて、
身は沈みゆく埴(はに)の星。
幻師(げんし)やすゑし妖(えう)の座(ざ)の
あたりさりあへずわれは聽く、
　光に朽つる石人の

『刹那』の蠹魚を。

くぐもる殻は生ひかはり、
翅掩へる當來の
鳥座ぞとほき。——眞夜、まひる、
まぼろし、夢の憂かる世を、
　嗚呼破りがたし、石人の
　領らす囚獄は。

あまりりす

水盤に
あまき露うけむ、
君がゑみ
花とさくその日。

胸に蒸す

にほひ眼にうつり、
君がゑみ
眞晝かがやける。

あやしうも
あでに、睡蓮の
夜をかをす
ほこりには似じな。

わが戀の
たとへ、また、（榮の
古跡や）
荒む野となるも、

わがこころ
ここに、なほ、清き
水盤の

花のつゆうけむ。

夏に添ふ
花やあまりりす、
君がゑみ
花とさくその日。

夏がは

みづぐさ青み、夏川の
（妖（まよはし）のこれ影か夢）
水のとばりの奥ふかく
ゆららに洩るる姫が髪。

眞晝青岸（まひるあをぎし）、ひたぶるに
（妖のこれ眞鏡（まかがみ）か）
いのりて更にまじろがず、

伏してながむる水の面(おも)。

いかなる姫か、ひもすがら、
　（妖のこれ妖か）
いかなる姫が細髪(くはしがみ)、――
顔(かほばせ)のはた見まほしき。

河浪のこゑ、水のこゑ、
　（妖のこれはかなさか）
こゑ、ごゑ、溢れあざわらふ、
『花のおもては見がたし』と。

水草(みづくさ)なびき、夏川の
　（妖のこれその望み）
水のとばりのさはりなく
いつかは、清き面影を。

姫がくろ髪、ひもすがら
　（妖のこれそのちから）
夢とも消えで、はてのはて
にほひにこもる姫が眼(め)よ。

さあれ、瑠璃宮歡樂(るりみやよろこび)の
　（妖のこれそのをはり）
姫にひかれて、常夏(とこなつ)を
百合(ゆり)のいづみのひとしづく。

夢のむすめ

夢のむすめ、とこをとめの
眞白手(ましらで)もてともなひゆけ、
永劫(とは)に問はじ汝(いまし)が名は、
いづくはあれ、ともなひゆけ。

夢のむすめ、永劫に遠く、
いましが手の、われ左に、
右には花。――ひかる瑠璃の
花のかげにつつみて往ね。

十歳は虹霓、千とせはこれ
月日の瀬にめぐる、
夢のむすめ、古りにし代の、
ああ、何ゆゑ舞ひかがやく。

命の芽はかのほのほに、
生葉の戀虹霓にまとふ
たのしきこの一時をば
いましに、今日、また見むとは。

夢のむすめ、にほひの姫、
風にも似つその黒髪、

その眼(め)はまたいとしづかに
かの色鳥(いろどり)あそぶけはひ。……

夢のむすめ、嗚呼さはあれ、
われをかへせ再び世に、
いましが胸むなしきまを
うつつの世にわれや生(い)きむ。

古墟(ふるつか)にも闇の小草(をぐさ)、
知るや、その根いだきそへば
瑪瑙の髄(ずゐ)とけもやせむ、——
ここにひとり命(いのち)ぞある。

夢のむすめ、うつつにいざ、
いましもまたうつつの姫、
いでやかしこ、夏にあふれ、
秋にしづくまことの日に。

海のさち

（青木繁氏作品）

あらぶる巨獣の牙の、角のひびき、——
（色あや今音にたちぬ。）否、潮の
あふるるちからの羽ぶり、——はた、さながら
自然の不壊にうまれしもののきほひ。
すなどり人らが勁き肩たゆまず、
胸肉張りて足らへる聲ぞ、ほこり、
よろこびなるや、たまたまその姿は
天なる爐を出でそめし星に似たり。

かれらが海はとこしへ瑠璃聖殿、
わたづみ境を領らす。さればこの日
手に手にくはし鈎とる神の眷屬、

丈にもあまる大鮫ひるがへるや
魚の腹碧き光を背に負ひつつ、
上るはいづこ、劫初の砂子濱べ？

琴天會に寄す

美酒、ほほゑみ、ともに匂ひかはし、
甕より、はた面よりあふれいでぬ。
擧ぐるは玻※の盞、それのみかは、
藝の日照らす宮居を彫りちりばめ、
ましろき膚ががやくみ姿をば
浮べて世にも奇しき高坏こそ、
想ふに、一夜まとゐの中にはあれ、
さてしも歡樂、人を醉はしむるや。

たをやめしのべば花の巴里の園生、——
朽ちせぬ光のべたるみ空趁へば、

なつかし、伊太利(イタリ)の旅路(たびぢ)、精舎(しやうじや)の壁。
言の葉小舟(をぶね)いつしかわれを載せて、
暁、夕と移る物がたりの
舵(かぢ)とり、帆あげてくだるせいぬ、あるの。

三十六年十月

それゆゑに

日は照りぬ、
そしらぬけはひ、——
日は今雲に舞ひうかぶ、
よしさもあれや
そしらぬけはひ、——
それゆゑに君を戀ふ。

著莪(しやが)さきぬ、
そしらぬけはひ、——

また花さきぬ花あやめ、
わりなくも君、
そしらぬけはひ、――
君やかく、君やなぞ。

著莪すでに、
また花あやめ
すでにしをれき、六月（みなづき）の
百合こそさかめ、
そしらぬけはひ、――
君はただひとり行く。

百合さきぬ、
そしらぬけはひ、――
百合はにほひて弱肩（よわがた）の
君が丈（たけ）なる、
おもかげ似たり

わが忘し園の百合。

君はなぞ
そしらぬけはひ、――
百合はくづれぬ、みなづきの
戀やみながら
あだなるねがひ、
あだなる日われひとり。

魂の夜

午後四時まへ――黄(き)なる
冬の日、影うすく
垂れたり、銀行の
戸は今とざしごろ、
あふれし人すでに
去り、この近代(ちかつよ)の

榮(さかえ)の宮は今、
さだめや、戸ざしころ——
いつかは生(せい)の戸も。

かくてぞいやはてに
あき人(びと)、負債(おひめ)ある
身の、足たづたづと
出でゆくそびらより、
黄金(こがね)の音走(おとばし)り
傳へぬ、こは虚(むな)し、
きらめく富(とみ)のうた、
惱みの岸嘲(あざ)み
輝く波のこゑ。

見よ、籍冊(ほさつ)の金字(きんじ)——
星なり、運命(うんめい)の
巻々音(まきまきおと)もなし。

一ぢやう、おひめある
ともがら（われもまた）
償ふたよりなさ、
囚獄の暗ふかき
死の墟、――いかならむ、
嗚呼、その魂の夜。

誰かは心伏せざる

煙は鈍む日に、
映りて、くらきむらさき、
ながれぬ、霜の壓す
弓かとひくく撓みぬ。

悶ゆるけぶり、世の
底なるいぶきか壞ゑくゑ、
うづまき去るかなた、

ねびてぞ墜つる日黄なる。

夕ぞらよどむとき、
靜かに、重し、すさまじ、
巷を空ぐるま
まろびてゆくに似たらず。

見よ、今煤ばめる
「工廠」いくむねどよみ、
その脊をめぐらすや
いさ、かの天の耀光。

聖なるちからには
后土とどろき、蒸して
騰れるゆげには
うるはし花こそこもれ。——

かからむ花はまた
世になし、ひらめくひかり
遽(にはか)に※(まと)を洩れ、
強き香照(か)らす束のま。

鳥啼(な)く――ああ鐵槌(つち)の
ひびきよ、かぎろひけぶる
ただなか、戰(たたかひ)の
胸肉刻(むなじしきざ)む聲なり。

誰(たれ)かはこのほとり
ゆく時こころ伏せざる、――
痍(きず)にか、身に逼(せま)る
道にか、高き御名(みな)にか。

家根のくさ

三十八年三月

家根(やね)のくさひでりにかわく、
かわくとて垂るる甎(うはじ)や、
露もなき葉ずゑの眼もて
焼(や)くる見よ、甍(いらか)の波の。

家根の草かくて乾くか、
夏はこれさかりのみやこ、
棟と軒、甍と瓦、
蒸されつつ人はひそめり。

かの瓦照りてたはむれ、
この甍やけてほほゑむ、
人の世はそのかげに、——今、
轍鳴(わだちな)り、人はそよめく。

ただ悶(もだ)え、ものの朽ちゆく

にほひのみ、（さればぞ天(あめ)の
光あれ）人はいつより
ちりづかのかげの弱(なよ)ぐさ

家根の草つひにかわきか
かわくとも、これや黄金(こがね)の
髪おほひ漲(みなぎ)るなかに
きえてゆく紅玉(こうぎょく)のはえ。

譯詩三章

○

甘睡(うまい)よ、をぐらき、ふかき、
掩ひねわが身のうへを、
願望(ねがひ)はあだのみ、うまい、
うまいよ、あくがれそれも。

いま、われ盲目となりぬ、
今、また惡しけく、善けく、
そのかげこころに滅えぬ……
ああうらがなしきしらべ。

懸床ゆららと、われは
墳塋ごもりて揺する、
こわねもひそめて、去ねよ、
寂寞ただこひもとむ。

○

丘、かきね、疾く飛びすがへば
薔薇だつ緑ひとつら、
はた黄なる車の燈火
うつら眼になべてを混ふ。

（ヱルレエヌ）

たそがるる谷村（たにむら）のをち
ややに黄金（こがね）あからみゆきぬ、
ちさき木々（きぎ）たひらにわたり、
よわき音に啼く鳥もあり。

いつくしき、やはらこの秋、
かなしともなくて、うるはし、
なしのまま倦（うん）ぜるわが身
軟風（なよかぜ）にゆられて夢む。

（おなじく）

○

樹立（こだち）の額（ぬか）のうへ
ながむる月青く、
枝ごとに
たゆたふ曲（ふし）や

幽(かす)けき吐息(といき)……

ああ、あくがれごこち。
柳の木のふたつ
なみだち、かつ嘆く、
ひとつは微風(そよかぜ)に
ひとつは河みづの
鏡の深き底……

夢みて夢をわれら。

むりやうの
圓寂(ゑんじやく)
しとに降るや、白き
夜霧(よぎり)の、月そそぐ
影に彩(あや)なすあたり……

移らざれ、『時』のまどけさや。

（おなじく）

夏まつり

一

金の屏風をめぐらして
祭物見のしつらひや。

金の屏風の繪模様は
光琳もやう、花もやう。

花は紫、かきつばた
水もあやなる雙鴛鴦。

祭物見の大店の

塵だにするゑぬしめやかさ。

縁(えん)じやのさきの美(うつく)しき
顔もそろひし女客(をんなきやく)、――

見ればとりどり水草の
祭の浪に誘(さそ)はれし

それとはかはる身だしなみ、
清らやここの中(なか)むすめ、

ことし十五の初夏と
うちそやさるる娘まゆ、

かひな、肩つき、たをやかに
をどりのふりの裾さばき。

をりもをりとて町内(ちやうない)の
屋臺(やたい)ちかよる絃(いと)のねや、
足(あし)なみ浮(う)かれ行く人の
表(おもて)どほりの賑ひに、

眉ねすこしくうちひそめ、
そむけがほなるそのけはひ。

十五初夏、くろがみの
艶(つや)に厭ふか町の塵。

さなそむけそよ花の顔、
慕ひよる眼(め)のなからずや、

しばしの興(きよう)にことよせて
手をとるひまもなからずや。

君を慕ふがわかさにて
七人(ななたり)きそふ夏まつり、

君を慕ひて隣町(となりまち)、
われや數(かず)にも入らざらむ。

派手(はで)なるそろひ肩ぬぎて
聲張りあぐるこころ意氣(いき)、

そのすがた見てくらぶれば
戀にふさはぬわが思。

君を慕ひて、よろこびの
花笠(はながさ)いつかかざさむと

夏の日ざかり人ごみの

なかにまぎれて立てるとき、
生憎(あやにく)さわぐ胸のさき
警固(けいご)の杖のとどろとどろ。

二

たとへば、君が優姿(やさすがた)
夏は水際(みぎは)の花あやめ、

むかしおぼゆる大江戸(おほえど)の
水の香(か)ながく君に添ふ。

われも氏子(うぢこ)の、君もまた
おなじゆかりの氏神(うぢがみ)や、

神の祭の日に遇(あ)ひて

ふたり手をとるこのえにし。

戀はわが眼の瞳かげ、
情は君が花とさく。

眞ひるは人め避けたれど
夜街を君は厭はじな。

かけつらねたる挑燈の
巴繪づくしの華やかさ。

灯かげあふるる夜の道、
いざいざ戀の神の道。

二人伴ふ一歩に
みやこの土もよろこばむ。

ふたり歌はむ一節（ひとふし）は
なかばを君にゆづらまし。

いざいざ戀の神の道、
夜の灯（ほ）かげに君とたどらむ。

三十六年六月

鏽斧

（夫の伊佐奈、妻の止利）

夫の伊佐奈、妻の止利といふは海山に親しき名を擇びたるに過ぎず。伊佐奈は海の人なり、壯時橘の樹蔭に蜑の少女を慕ひて、戀の敵なるその友を殺せり。されど少女の意は彼に嚮はずして、亡き人の後を逐ひて海に沈みき。伊佐奈はこれより山中にさまよひ、迅雷の一夜、端しなくも宿りし家の女と相結ぶに至る。妻の止利といふはこの女なり。海の紀念なる珊瑚と眞珠とは止利が念珠を飾れり。唯橘の實を祕して、私かに門邊に埋めおきぬ。橘は芽ざしてより既に四十年を經たれども、未だ曾て花さかず實らず。こはまた宛ら伊佐奈の胸中なり。

海知らぬ止利が嫉妬はこの祕密に萌して、婚後一年、伊佐奈が携へ來し妖鏡を偸見して、始めて鏡裏に海波橘樹を窺ひ、白影漸く凝りては少女が姿を知り、少女が手を執る夫を嫉みぬ。たまたま尼僧來りて鏡をとれば、妖影消えて、ただ剃髪したる少女を見たり。尼僧は懺悔の功德を言へり。伊佐奈はなほ祕密を持して老齡に達しぬ。橘を咀はむといひて手に斧を取り、止利と相對し、夫の斧を下さむとするを妻とどめ、「來む歲ぞ實らむ、やよ待て」と言はしむ。伊佐奈はこの時はじめて胸中を洩らしぬ。白き少女の影は遽かに止利の眼を遮りて、夫が咀ひの言葉に答へず。斧は下りて、橘は根より僵れ、伊佐奈も亦呼息絶えたり。この中鏡のことはわが邦の傳説に據りたり。もと夫が鏡裏に見るは亡き父の面影なり。果樹を咀ふは今もなほ所々に行はるる古來の習俗なり。

『夫の伊佐奈、翁よ。』『それや
しわみたる曲嘴の妻の
止利よ、など、さやは囀づる——
夫の伊佐奈、翁と——措きね。』

『さもあらば汝古伊佐奈、
潮鳴る海坂のぼり、

喘ぎつつ、白泡ふける
老くちら、翁よ、それか。』

『今日もまた宵やみならで、
祥なくも怪鳥叫びぬ、
あきはてぬ、この深山はや、
嘴太の、妻よ、死烏。』

『死鯨。』『やよ、老がらす。』
『嗚呼、わが夫、口ぎたなくも
罵れり、おもへばわかき
日のつやも失せにし言葉。』

『わかき日を汝も戀ふるや、
ただ戀し、われは古里、
親の國、母の渚べ、――』
『戀の舟――それのみならじ。』

『なほ嫉め、――舵の枕かは、は。』と夫の伊佐奈の言へば、
妻の止利は『年月汝が
海がたり、また磯がたり。』

『黒水の晝はよどみて、
朽沼の夜の怪火、
山小菅なびかす風は
磯の香のひろきを知らず。』

『夫の伊佐奈、汝とあひ見て
はや四十の年月かさね、
海がたり、また磯がたり、
海を見ぬおのれも飽きぬ。』

『倦みにしか、はや、わが胸の

底をしもとめざるひまに。』
『汝はいへり、彼處には舟
眞帆あげて笑みつつすすむ。』

『げにさなり。』『汝はまた言へり、
かしこには潮と潮、
干てはまた滿つよ朝ゆふ、
雄の浪は雌の浪趁ふと。』

『げにさなり、されどまた、』『ああ、
けふこそはわが海がたり
はや聞きて、はや飽きてあれ、
その海を。彼處にはまた――』

夫の伊佐奈今は默しぬ、
『かしこには鴎てふ鳥、――
青浪に白鳥映り、

千重の浪、百千の鴎。』

夫の伊佐奈うちほほゑめば、
妻の止利はいと誇らしげ、
『金色の如來阿彌陀の
御經をも誦んずるわが身、

『さればまた弛くはあれど、
夫が淨土、海としいへば
夜がたりの片帆、片羽の
ふしぶしもつばらに知りぬ。』

『それこそは、止利、曲嘴の
えうもなき空轉よ、
ごくらくの妙音鳥も
汝が聲にひるみやすらむ。』

『さな言ひそ、わが夫の伊佐奈、
海の人、伊佐奈は海の
美魚、鮪つく銛を
若うしていしくもうちき。』

『その銛を、星のごとくに
射てもゆくその銛を、止利、』――
夫の伊佐奈妻の止利見すゑ、
『その銛を何とか知れる。』

『鮪つくと汝はいふ、さあれ
わすれたり二人は今日を、
みのらざる門の橘
咀はむと言ひにしものを。』

夫の伊佐奈手には※斧、
乾びたる腕に重く、

たゆたひて、『ああただ一樹、
橘もかの日のかたみ。』

『實らざる、何の紀念ぞ、
むなしかる夢や。』『さな、さな、
妻の止利よ、さな啄みそ、
汝が口は老て鋭し。』

『實らざる、否咀はむと、
橘を、——むかしのかたみ——
汝こそは言ひも出でつれ。』
『げに紀念、古里の種子。』

『汝こそはいくばくもなき
この命つきぬその間に
橘の花さく見むと、
花にほひ、實るを見むと——』

『橘はにほはざりきな、
海の郷離れて山國、
谷あひの日影をわびて、
わがごとく年をへしのみ。』

夫の伊佐奈また言ひつぎぬ、
『汝を見しその日のはじめ、
迷ひ來し谷村の夜、
この山にいかづち裂けぬ。』

『亡き母はつねに語らく、——
雷電の社の神は
えうなくば人を痛めず、
神怒、蹇者も起つ。』

『火は走り、焔は飛びき、

かの夜に』と伊佐奈のいへば
妻の止利は『神の結びし
えにしこそ四十の年月。』

『そのをりにわが祕めし玉
三つぞ、ああ、白きは眞珠――
海の月、赤きは珊瑚――
これや日か、海の月と日。』

妻の止利は『げにその二つ
汝が手よりわが手に傳へ、
今もかくる念珠の※苡、
山の實を照らす日と月。』

『そのひとつ汝には祕めて
この門べ埋めおきたる、
橘のこれぞ生珠、

芽ざしし日、はじめて告げぬ。』

『などや、夫(せ)の伊佐奈よ、惜しみ
祕(ひ)めにけむ。』『あはれ妻(め)の止利、
埋めしは胸のひめごと、
生(お)ひたちし木にも花なし。』

『花もなく、また實(み)もなきや、
夫(せ)の伊佐奈。』『いざ咀はなむ、
來む年ぞ繁葉(しげは)の海の
浪の華枝(はな)にかかりて、

『くだけちるにほひを知らむ、——
海ちかき籬(まがき)のけはひ、
浪洗ふ沙(いさご)の光。』
妻(め)の止利はただ聽きに聽く。

『妻の止利よ、いざ咀はなむ、
※斧をわが手にあげて
橘の根をうたむとき、
しばし待て、やよと汝は言へ。

『何ゆゑとわが問はむとき、
來む年ぞ花はさきなむ、
あやまたず實りはせむに、
橘となだめて言ひね。』

妻の止利は老の眼ほそめ、
老の口ゆがめてあれど、
夫の伊佐奈※斧とりて
ほほゑまず、はたまじろがず。

橘をうたむとあげし
さび斧は、やよ待て——と妻の

止利のまだ言ひもあへぬに
力なく夫の手すべりぬ。

夫のまへに白き影ゆき
手をおくと妻の止利は見て、
妻のまへにゆたにまひろき
海を夫の伊佐奈は戀へり。

夫の聲は潮のしぶき、――
『汝と見し一年の後、
呪女の咀ひをこめし
古鏡われぞもて來し。』

夫の聲はうづしほのこゑ、――
『呪女は麓の村に、
古かがみ映りしは何、――
海戀ひし、母の渚べ。』

夫の聲は雄の血、雌の血の
ささやきか、――『ああ、父のかげ、
母のさま、――映りしは何、
浪の夢、磯のまぼろし。』

夫の聲は荒浪を裂く
銛の音、――『愛しきわが妻よ、
まぼろしのその古鏡
偸み見て、さてこそ汝は――』

『われはげに、われは嫉みぬ、
尊かる淨土の寺の
尼君の來まさざりせば
身亡せけむ、おのれその時。』

『妻の止利よ、見きとは何の

影なりし。』『涯なきは海、
浪ぞゆく、空はにほへり、
ふくよかに海は處女の――』

『海はげに處女の胸か。』
『やがてまた青き樹蔭の
籬みち。』『ああ、妻の止利よ、
青葉こそもとの橘。』

『その樹かげ、夢は花さく、
黒髪のわかき手弱女、
あらはなる踵もねたし。』
『妻の止利よ、そはわがもとの――』

『そは知らじ、その手弱女の
手をとりて、いましは涙、
そのをりよ、（ああ嫉きかな。）

尼君はここに來ましき。』

妻の止利はさらに口疾く、
『尼の君鏡見すかし、――
たをやめは頭髪おろしぬ、
あな尊と、懺悔と言へり。』

『ああ、懺悔。』『その古かがみ
尼君の寺にをさめし
その日より映す白鵠、
孔雀、鸚鵡、淨土のすがた。』

『古鏡さもあらばあれ、
この老の胸をばいかに、――
わが銛は友を斃しき、
戀がたき――眞鮪や、あはれ。

『その銛を、星のごとくに
射てもゆくその銛を、止利、』――
夫の伊佐奈妻の止利見すゑ、
『その銛を何とか知れる。』

妻の止利を夫は見すゑつつ、
『たをやめは彼が後逐ひ、
深海の底に沈みき、
われは、ああ、いかに、汝が言ふ

『老鯨山に乾びぬ、
さあれ戀し、戀の古里、
たちばなの青き樹かげの
籬みち、母の渚べ。』

妻の止利はひとりおどろき
あやしみぬ、更に嫉みぬ、

その海を、手弱女を。――夫の
伊佐奈いふ、『過ぎしは空し。』

夫の伊佐奈※斧とりて、
『橘をいざ咀はなむ、
さきにわが契りおきつる
言の葉を、妻の止利、いひね。』

夫のまへに白き影ゆき
ささやくと妻の止利は見て
默すとき、斧は下りぬ。
橘は根より僵れぬ。

あなや斧、あなや橘、
花もなく、つひに實もなし。――
『あなや妻の止利』と言ひて、
夫の伊佐奈呼息たえ果てぬ。

（明治三十八年七月刊）

青空文庫情報

底本：「日本現代文學全集　22　土井晩翠・薄田泣菫・蒲原有明・伊良子清白・横瀬夜雨集」講談社
　1968（昭和43）年5月19日初版第1刷発行
　1969（昭和44）年10月1日第2刷
底本の親本：「春鳥集」本郷書院
　1905（明治38）年7月
入力：広橋はやみ
校正：荒木恵一
2014年11月14日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

春鳥集

蒲原有明

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/